

## 刊行にあたって

フッ化物の応用とう蝕予防について、最新の知見をまとめるチャンスとなった。フッ化物の応用は、私自身が臨床をとおして来院患者に、あるいは教育をとおして大学生に、更には講演会をとおして一般市民に対して、う蝕予防の効果を伝える過程で必ず触れてきた内容である。本書に掲載した多くの図表は、より理解を深めていただくために、それぞれの機会に作成してきたものが基礎となっている。

本書が、フッ化物を応用する側の歯科専門職である歯科医師や歯科衛生士、またフッ化物について学んでいる歯科学学生、更には既にフッ化物を利用している、あるいはこれから利用しようとしている一般の方々の理解を深めるための参考となることを願っている。微量元素であるフッ化物は、歯に対してはう蝕予防効果をもたらすほどに、その全体の性状を変える能力を発揮する。微量の場合にのみ、善玉として作用する不可思議があるからこそ、その能力を知る価値がある。

本書を執筆するにあたり、「化学物質の健康リスク評価」には、パラダイムシフトと呼ばれるほどの変化が起きていることを随所に記したつもりである。いわゆるリスクの内容伝達に関して、これまでは情報の送り手が受け手に過度な心配をかけないよとの配慮からあまり伝えてこなかった。むしろ黙っている場面も見受けられた。化学物質を利用する側の受益者も、専門知識を有する専門家が応用するのだからと、安心して全面的に任せてきた。一方、専門家は利用者のことを第一に考えているから任せておけば大丈夫という、双方の暗黙の了解のうえに成り立っていた感があった。

それが、医療における患者と医師との関係性であるインフォームド・コンセントと同様に、あらゆる分野で地域住民や受益者と専門家や有識者との関係において、前者の自己決定権、知る権利、説明を受ける権利の基盤整備が浸透し、一般の人々の意識が変わりはじめた。

今後は、専門家には知らせる義務を意識した“説明”を行い、“同意”を得る努力が求められる。それに応えることができないとすれば、筆者の力量不足に原因があることになる。今日の時代にふさわしいフッ化物の応用が、いま以上に普遍的、日常的になる近道は、フッ化物の応用を実施する歯科保健関係者自身が安全性と効果に関する情報を正しく理解し、多くの受益者と関係者にその有用性を確実に伝え、誤った理解を正せるようになることである。その努力がいかに困難であっても継続していかなければならない。そのためにも叱咤激励をいただきたい。

化学物質と健康とのかかわりについては、「正しく怖がる意識と姿勢」をもち続けることが最も大切である。また、健康情報の信頼性に関しては、私たち自身が科学的なエビデンスの「質」を問う意識と、情報を批判的に吟味する姿勢をもつことが最も大切であることを教えている。

飯島洋一

《2010年2月末日 伊王島にて》